

富士紀行（10） 女人禁制異聞

富士紀行（7）号で書いたとおり、富士山は嘗て女人禁制の御山であった。女人禁制の謂われに関する伝説がある。

昔、日向の国に貴公子が居て、后たるべき美しい娘を国内から捜し求めていた。やがて、白羽の矢が立てられた中に美しい姉妹の姫がいた。姉は巖長姫、妹は木花開耶姫と呼ばれた。姉姫を后として内定されたが、王子は人知れず妹姫に恋して、彼女に胸の内を打ち明けた。妹は姉のことを思い、意を決して日向の国を旅立ち、遂に富士山に到着した。姉と王子は妹姫を必死に捜し求めた。が、巖長姫はいつの間にか妹姫に嫉妬の炎を燃やし、狂乱し、妹を追って富士に到着した。

彼女は妹を求めて険しい山道を登り始めた。何時しか雷雨激しく、暴風雨に阻まれ、彼女は気を失った。黎明に気付いて姫は崇高な山気に心を洗われ、何時しか嫉妬も悩みを消え去り、和やかな気高い神の心が変わった。「妹よ許しておくれ、私はこのまま山を下りるから、お前はお前の心に似たこの美しい気高い山で暮らしておくれ。そして私のような汚れた心のものをこの山に登らせてはならない。私はお前のために札を立てよう。女人禁制の札を」姫は妹の住む富士と相対する伊豆の国松崎の雲見山に住み着いた。

（出典：文化財のしおり第17集「御殿場の民話・伝説」御殿場市教育委員会発行）